

# グローバル経済と金融 システム研究 経済・南雅一郎 助教授

各国の国民所得、物価、アジア通貨危機。大阪市立徳山大学の専任講師とな水標準などの経済集計の間、大学大学院経済学研究所で「国際通貨論」の授業の関係を、金利、為替相場などで「国際通貨論」を講義する南助教授の研究室を訪ねてみる。南助教授の研究室を訪ねてみる。南助教授の研究室を訪ねてみる。



これからの研究課題などを語る南助教授

## 論文を次々発表

「国際収支に見る1980年代と90年代」「外庄と日本経済1980年代以降の対外経済関係にみる日本的特徴」「グローバル・スタンダードの誤謬」(以上平成10年)▽「金融システム改革の日本の推移」といわれる「グローバル・スタンダード論」に関する一考察「アジア危機とグローバル・キャピタル・フロー」▽「金融システム改革の予備的考察(以上11年)▽「金融システム改革のアジア的

## 「アジア危機」契機に グローバル化への変容を観察 金融システム構築過程も

政治経済と金融システムとが共有できる「場」がなければ、個別の金融システムは時代の趨勢に取り残されてしまうという危機感から、各国のシステムは実際の経済の動きや金融システムは、当然のことながら「理論通り」にいかない。「アジア危機」によって、各国の金融システムは「グローバル・スタンダード」への変容を余儀なくされたものの、どの国でも一律的システムになつたわけではなく、それぞれの国の歴史や文化的要因を加味した「個性的」なものとして取り入れられている。

## 政治動かす経済へ

最近話題(?)の中国・人民元の切り上げ問題については「社会主義市場経済システム」というものは、政治と経済のぶつかり合いを見せる上での具り上げも、徐々にという関係性を深めるため、スワップ協定、アジア債券市場の構築といった動きが進んでいるが、そうした中で、アジア諸国間の金融的連関はどう進化するのか、金融システムに気づくことがある。し



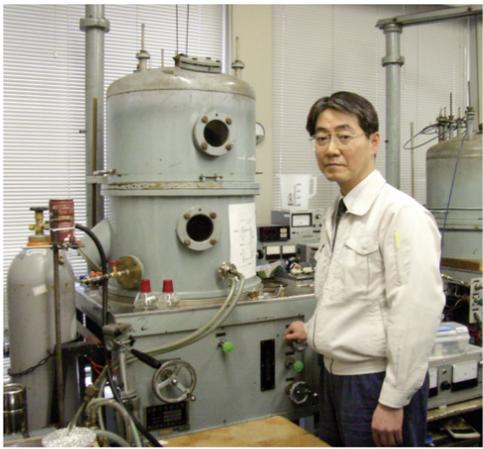
自主ゼミで、学生たちの研究発表を聞き、コメントする南助教授(左から2人目)

南雅一郎(みなみ まさいちろう) 平成9年3月大阪市立大学大学院研究科博士後期課程単位取得満期退学。徳山大学経済学部2年イリノイ大学大学院経済学研究所助教授を経て13年4月から本学経済学部助教授。青森県出身。42歳。

## プロフィール

△はどのように構築され、自国が予想外に目についていくかなどを「アジアの域内資金循環」「国際金融システムの安定性」と価値観が改めて問われたりといった語句を軸に論じてみたい」といふ。

## 窒素プラズマ照射による窒化鉄生成 生産工・新妻清純 助教授



窒素プラズマ処理装置の前で新妻助教授

性能のいい磁性材料の1、磁気ヘッドなどの開発を目指している。磁「ソフト材料」に使われる材料は永久磁石、ハーターている。どちらに使うに「ドディスク」の「ハーターしても、磁束密度(磁化材料)や、磁気センサー値)が高いものが優れて

現存する磁性材料の中では窒化鉄(Fe<sub>3</sub>N<sub>2</sub>)が最も磁束密度の高い物質といわれ、昭和47年に初めて窒化鉄生成の成功が伝えられた。ところがその後、同じものを再現することができない。窒化鉄は作られているのだが、磁束密度の大きいものが出来ぬ。どうすれば磁束密度が大きくなるのか、まだ解明されていない。

## 強磁性の材料開発へ

### バルク製造では特許取得

#### 「不純物」を探す

高性能の磁性材料には、中に酸素とか炭素とか、何かが入っているのではないかと、最近の疑問。研究室ではこれまで、100%純粋な窒化鉄を作ろうと、真空中で作ってき



電気電子工学専攻の大学院生たちと語る新妻助教授

新妻清純(にいづま きよひと) 昭和57年本学生産工学部電気工学科卒業。59年大学院生産工学研究科博士前期課程修了後、キヤノンに入社。8年VTRなど所屬。埼玉県出身。47歳。

## プロフィール

た。しかし磁化の高い窒化鉄が出来たのは30年以上前から。当時の真空状態はそれほど良くなく、逆に何か微量の不純物が作用していた可能性がある」との観点から、さまざまな実験を繰り返して、酸化チタンに注目

## 酸化チタンに注目